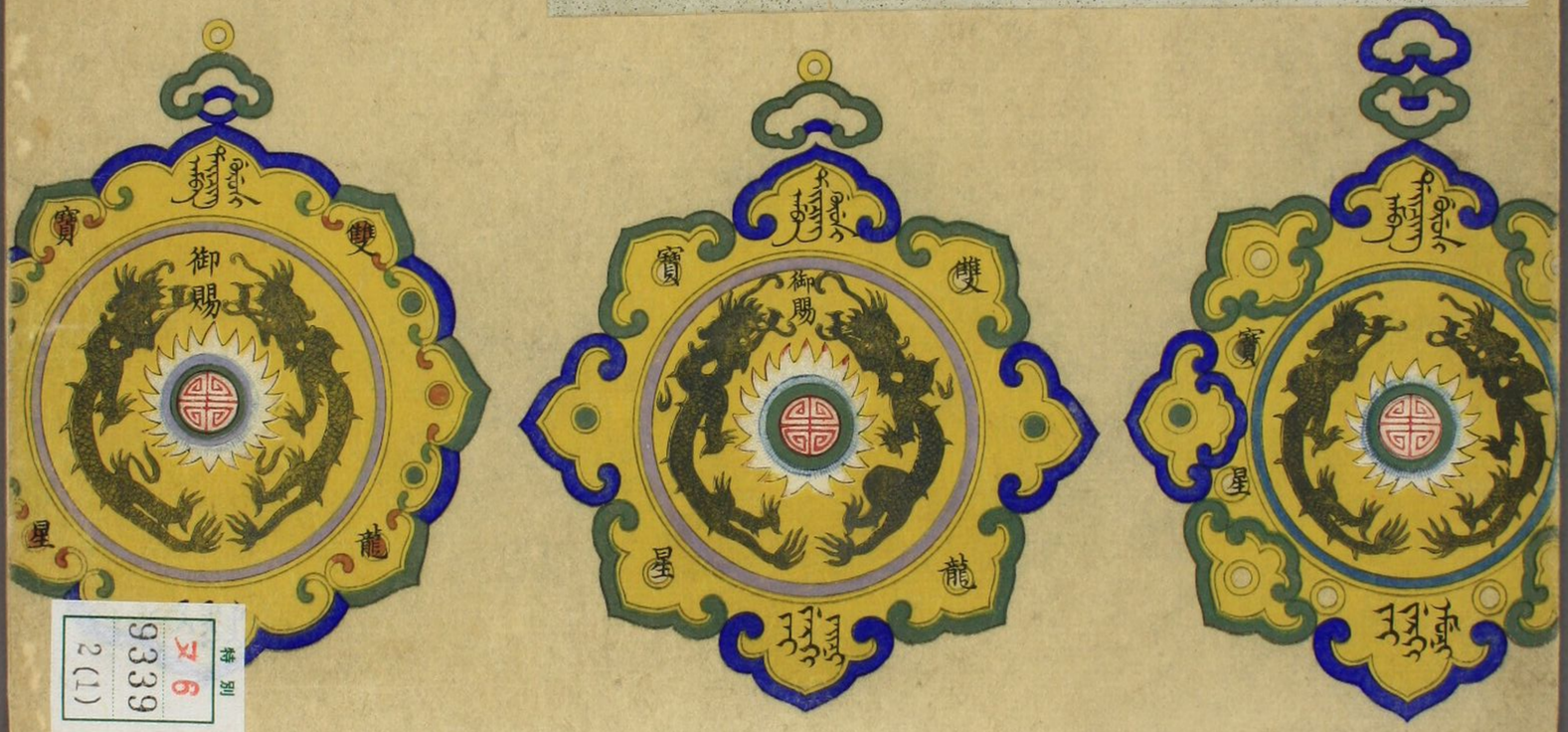
國頭等參贊
事官總教習等



特別
ヌ6
9339
2(1)

貴
Z6
9339
2(1)

竹清藏

山中文庫

甲斐の為葉

さの書を京がめられ二十荒六年の冬甲斐へ移住なしたる
ふを数年目見聞したるを母性のはまに過ぎるを
を写すかたそのものいて嫁序部分の別もなく
為ふ家かを家めたるばかり也

（サニ年八月下旬記）

（三十四年）められ三年目に初て秋

山中共古

甲斐の名所巻三上

山中共古著

甲府の町数

甲府の町数い就て甲府宮地の古城せられ宮之宮小路のことを記せ一書に之下の町名九箇家数二千八百廿七軒同数一万二千九百五拾四戸人足七万拾五人本戸三千七拾七軒あり同武又名当高百三千石余郡代あり明治廿六年の調べに甲府三千七百廿七町之府中廿六町これに飯田村稲門村の町名の部にのりたるれば此を拾六の移あり戸数六千拾七戸なりと宮沢氏の記るる分六千七百廿七戸なるが二戸数の多かるに二戸数の多かるにすべ

斗の代用もの

物と人に勝るとも劣らぬ斗を用ゐる代りに汐木を鍋墨を拾先につけ更に汐木をつけて

[illegible]

附木（こを黒くして原）代りとするもあり青物には鼎の代りに
鳥の羽根を用ゐ又はさまめを二疋添をとす茶を紙包にして器
物にそゝるもあり松の葉枝をもの〻ともなすもあり

附乳

小児初て乳を飲せる時には附乳（つけぢち）とゝて男子のゆゑ女子を持た
る婦人の乳を吸はせ小児女ならば男子の吸ふ乳を吸はせ其後
母の乳を吸はせてそゝるす

産婦（さんぷ）に飲す食

出産がさもと直に取り上げ婆に飲ませたき松魚節をあぶり塩をそゝ
食ゐをさめこれをぬにも食させを例とす

女の子（おんなのこ）紅（べに）をつけ

女の子もすするとて額の真中へ紅をつけることゝす

宮参

七夜を祝い盛んに饗す此日月ふに宮参とて神社へ出詣し
其日宅へ帰るとき嫁の里方へ赤飯を例

善光寺の小児（ぜんこうじのこども）

とす
善光寺の小児の成長を祈願し善光寺ぜ素の麩子とするとゝふのゝて
男女とも出産頭のさゝ中の毛をのみそりとゝ支那人の頭髪の
ごとくにすこれをチョンボリとゝ

別火

産婦と家内の者とは火を別にして飲食する家もあり

サンシの食物

産婦を方言サンシとゝふ産かれもとゝ塩にてたきたての
飯を食させ又岩茸の味噌汁をサンシに食させをゝす

七夜の食物

七夜にさ赤飯をふかしこんぶ大根をかんなゝて薄くすぐらな
ども蒸て食さす

胞入（えな）

胞入れには土器を用ひることをゝ柄杓なを造る曲物屋にて用の如き
ものを作り胞入とす通例は柄杓の柄をぬきとる曲物として用ゐ蓋
には紙をもつてゝくひあり引ゝて結び地に埋む

胞入　由物かぶせ蓋　模様
松竹梅　鶴亀を画く

ヨシキ

七夜の祝い又は婚礼の祝いに赤飯の重を送るときは重を迎すいヨシキと称し一銭二銭の銭を紙包にして重の内へ入れて返す

二銭包の紙々持の先に結をつけて押して結びきりをかける

ヘソクリ茶

婚礼の三々九度の盃の後ち新婦は衣服を改めこ座敷へ出で自ら茶をつれ親戚多数へ近隣の者へ茶をいだす礼あり

ヘソクリ茶とる

コジウヅケ

結納物

新婦と同行して婚儀の三箇日までの女をコジウヅケとふ（所縁のもの）

結納には帯上反かさねはるもの紅白彩色らがさぶを用の社

里帰の祝

中に少びきんぶの外もの下駄足袋を納結物かるもあり

婚礼里帰りの祝に新郎里方より祝儀の重を持なて来る

特別里方より特別祝儀を迎也多おもの者配り里方より

持来る者に祝儀を返礼に祝儀をかし

御柱年

配りて里方よりとして配る

御柱年（ごばしらどし）に婚礼せぬものと祝儀結婚されが縁に成ると社会が

信州諏訪の神事に御柱（ごばしら）と寅申の年に柱木を八木伐る祭り

あり社祭り人夫多くかるゆへ（今年が婚礼もお見めをいひしら

起るのと寅年ゆへ虎ハ千里行ると云て嫁ふと

申年ゆへ去ルの言と嫁い社いみ年をなるすいおろかなるなら

嫁ふのハ新郎の家（行く前に小宿（コヤド）とゝして親方の家

か知人の家かへ立ち衣服を改め新郎の家へ向こてます

小宿

酒さかな

双方見逢い酒み相談整ふ清が仲人い酒をつれとるとかたの酒を持来るこれにて相談極りなるなり

清菜

両方のかたへ十月末より十二月中旬まで清菜をみすゆるに毎家孫總おそれ流れさそいなるを洗ふこと有ナトリとふて中等ニの妻女もおて洗ふ清菜を来年の夏比の香のものと極く古くなりて食さんぬ抜いなると洗いわらそべを入れ煮酒煮にして

いなご料理

食す

蝗蚣料理の法い煙々あり抜なるう天ぷら維にしなるうがつになせさあり出しのなるかたるもあるの巻の中へのんなるい並ゆるて食べなる中に蝗蚣料理なうて蝗蚣と精霊ばつれとを煮なるを食しなる精霊ばつたいばかゑ又あるものなるう食さんぬものいいあらんべ

さなぐを食す

蝗のさなぐを由そういなるめ塩油煮にして食すう煮あるう味佳ならずやさらかゑ嬉なるものと煮め

柿の皮

さらに柿になるすゆめもをなる柿の皮を干し煮々炒り見世あるなんばなんいなるやと問い〜に子供のなるべものに合三重まで煮とるう

蛇あめ平

連雀所に飴平とあめを煮るものあるう（なるま蛇）なるとき〜地蛇を食すなるすゆあるとなるべ

そら豆の莢

そら豆を莢ごと煮て食すがさ〜して味佳ならんべ

茶がしの代りとなるもの

茶がしの代りとなるもの

米粉あると茶菓を作べなるすこと菓子なるなるぬい砂糖を四に壁りおしさべを添へなるなるなるとなるあるて茶を飲ませるゆるとすゆ甲迄一般何んの地も砂糖と茶かーにもるす香の物ならさやらなるべ砂糖を抜て茶煎とす何かーら茶がーとして添へぬいなる

ががぼ蓮葉の用

塩魚など包む竹の皮なるめ代に蓮の葉を二ツに押しつけ

かげぼうにさすを代用とす

清めご

葬礼の送りをもてる家に戻る人口まで家の前に塩水を水の枝葉につけて振撒き清めるの風習あり塩をふりかけるものあり

ミカバナ

葬礼の時親戚さしミカバナを持て棺にそふて墓所の白紙にて先の方を青紙にて造る勝田村辺にて見たる白紙の外にて青色の紙を用ひる

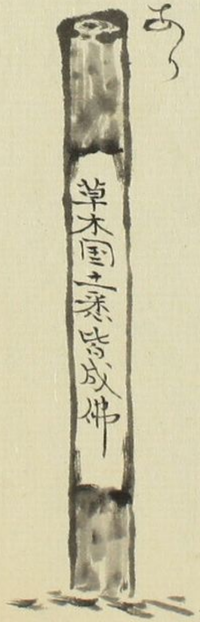
柳塔婆

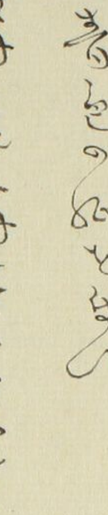
新墨村龍王村等の墓所にて柳塔婆とふを見たり柳の丸木を五尺位にて皮をけつり図の如く記し墓地に立てる

これは年の法事の時にするものとこの柳に根が生ずると仏が生れかはる心しるしとする人もあり

柳塔婆の図

表に戒名を書き裏に如図に書す

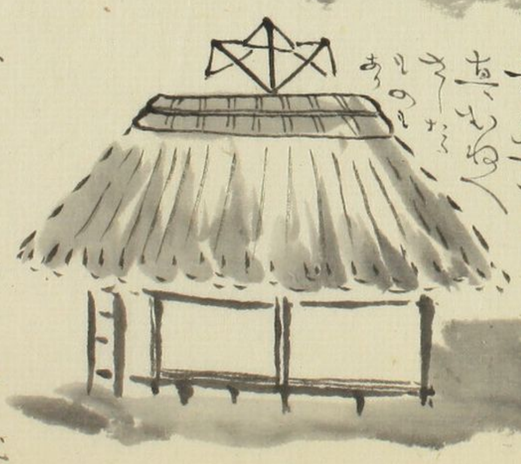




新ふきの草屋根

草屋根を新にふく時さむきころを三日月形を造る紙を三角にたたみたる幣を三本さす

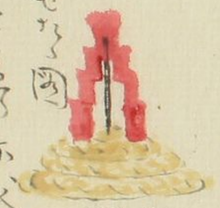
東山梁流村中巨摩流村に見えるオ紙を二枚にして串へはさみたる幣なり



三日月さしも真ん中にあるものあり

疱瘡神送り

疱瘡神送りの赤幣を屋根へのせる図



屋根へ竹を造り赤紙の幣をさんだるの上へ竹をしたる甲州村辺にて戸毎に見たる竹幣子は細き竹を作りたるもの

さんだらと三枚かさねる赤紙の幣をたらしたる普通なり

右に図する疱瘡神送りの赤紙の幣束をそんだらの〜たるの
はこの中諸方いも見受なるが何れも天然痘にはあらべ種痘せるの
に疱瘡神送りをなすなり〜〜〜

商人の浮聲

賣り物の浮聲

○傘のハソンハヨシカ子ヨシカ子（赤糸のからかさつくろひもと）

○ヘイヤヨカ ヘイヤヨカ（反賣なり）

○ダシゴバラハヨイカ子〜〜〜〜〜〜。モチバラハヨロシイ（二月十日頃圓子をうるまゆ枝あり）

○ムキミシイ ムキミシイ（淺利むきみとうるもの）

○鰯のヒラキヨー ヒラキヨーマ（鰯の干物）

○トカフー アブラゲ コシヤリ（イナヤゴヲ）一反氷り

○カスワー カスワー サッケカスワー（酒粕うり）

○ホーロクヤコシロ ケシツボ ゴトク ハイカゴデスマー（土燒物うり）

○イナリサン イナリサマ（稲荷寿し）

○アシダハイレー

○ウドンバワヨロシイ

○水瓶ハヨイカ子ー（粗製ノ土瓶ヲ天秤ニ荷ヒウリニ来ル）

○炭ハヨーゴスカマー

○マー一杯キシヤー アマイ サトイリキシトキ

○辻占（イキナタヨリノコイノ辻占 紅梅燒ノ御茶菓子カライキナタヨリガチヨイト出ルヨ）

○バロウター〜〜〜（ちんづ賣）

○ラッノイレカマー

○ラシプヤー〜〜〜

○ナヽイロトヲガウシ　ナヽイロ　ナヽイロ

○ツケギハヨーヲスカ子　ツケギハヨーヲスカ子

○白飴ヤ　シロアメヤ

○花ハイヽカイ　ハナハイヽカイ

○ノコギリノ目立ミトギモノハイカヾデカ

○枝ハヨヲゴザイヤスカ　イタハヨヲゴザイヤスカ（女枝を背い寄るに）

○柏葉（カシワバ）ヲカイナスッテ（五月柏餅ノ葉ヲウルより）

○カシセウガノ彩ニコヲセシハヨイカ子（むさこがしと寒生薑の彩をうるもの）

ちゃうこうり

所の者在の者をからかうてそふに在の人はえてぐい親を賣りに来ると子供を賣りに大聲に呼はりくると北在り雜木の枝を所〳〵うりに来るときハヨヤハヨーゴスカヨヤとふとモヤハヨーゴスカとふのを親とさうゆ〳〵ふちゆ〳〵西在から出る柿うりハガキハヨーゴスカガキとふとカキハヨーゴスカとふたれどガキとさこゆゆ〳〵子をうりに来るとからかふちり

半天の源色

東京にて魚賣の半天はあさぎ淡の色に染たるが甲斐の商人の見世美者の半天を淺黄色の地に白く染すものとぞ

子供の子甲

紺染の半天ハ通例支にかぎる様なり

冬季いちると子供の子くびに子甲をちやんと見掛る東京にて下足なるもの　女太夫などの如きの子甲を甲斐の女の子供に掛らるゝを見たり

毛氣

女の頭に毛氣のたゝりさらぬハ希なり中等以上の家の女子も毛氣なるゝ者ハあるどろくことと

書生の言葉つかひ

所中一般に妻が夫に對する言葉ぞるひハ分外に丁寧なるが子供が

ビンビリ

親へといへば如何にもぞんざいなることばづかひなり
文字十六にあたればビンビリをとるものであいそなくびんびり ビンビリ
といふ衣服のたをあげをとるをうてまづよりといふもの又ハ如の
丈長さを細細を以てメあけるのをいふ

二文字やの符帳

今より凡百年程の前に甲府八日町一丁目に大町人ありたりしと
二文字屋幸右衛門とて呉服商をなし手代番頭見世の者等
弐百人余を使ひたるものなりしが奢りの為に跡形もなく家絶たりと
その家にて使用せし符帳ハ現今も信州甲州になして通り
符帳となれり

アメナカフツジ久(きう)ヤ

符帳

甲府商家にて用ゐる符帳にてよく知られたるものハ

ヲキヤクサマタイセツ

ゴ一ヒ二イ三キ四ヲ五子六ガ七イ八マ九ス十

ス一ヱ二ヒ三ロ四リ五子六ガ七イ八マ九ス十

メ一デ二タ三ノ四ツ五カ六マ七ツ八ヤ九

アキ二ナ三イ四ノ五ハ六ゲ七シ八サ九

等々 ヤミ三三 ヲニノテ三 ボオ六 ロニ六 カグラ十二 ヒマテ十五

の如き符帳あり

足袋の何文といふ符帳

甲府足袋とて丈夫なる仕立にて名高く甲府より大なる足袋商数軒あり甲府足袋の何文といふを示す符帳あれば左に記しおく

丁	五文
工	五文半
ㄨ	六文
ㄨ(ム)	六文半
レ	七文
レ(ム)	七文半
⌒	八文
⌒(ム)	八文半
⌒(八)	八文八分
口	九文
へ	九文半
へ(八)	九文八分

九文三分　仝　十文　十文半　十一文　十二文

右の十文半に限り正味十文三分の割ちんバ〇の下をつけ点三ツ三分の下なり九文三分ハ全く三分なるゆゑ口の下に三点をつけれ文半ハ別に山形下の九文半の皆帳を用ゆ

初買と達磨売り

一月二日ハ初買とて甲府市中午前一わたり人おもく柳町通り福俵達磨売りの見世出て大達磨ハ二尺五寸もあらんと思ふものもあり達磨を起き上るゆゑ養蚕繁盛かいこの起のようを祝い初買に買ふて蠶のようを見ると道磨の眼をつくることを初買見世のにハ白眼になれり道磨ハ赤さが通例なれど白色の達磨あり これハ木綿畑をねて者綿に色のあるを嫌ふて白色の道磨を買ふなり

笹をつけたる金達磨を初買の時と節ふの夜に柳町にて福だるまと呼び買ふ

ものこれを買ひ神棚に
こしらへ
こと
す

福俵ハふくろ俵を三俵或ハ五俵松ちくに積重ね其上に地と福の字つくれる帆を飾りとせ一ものを初買の縁喜ものとして買求め神棚へのせ祭ること

節分の豆、初雷の日に煮る福徳の図

井戸へさす幣

一月三日ひる中の井戸ぶき

紅白の紙二ツ折りに三角形にしたる幣を長く長くたるかやぶき屋根のさきにたてたるもの

井戸がさ

井戸がさ、さす幣来ル川ビタリの時にさすものとす幣の名をヒナと云ふとぞ

節分の豆

節分の豆を煮るとき鰯の頭と尾を豆がらにさしてつるしておくトビノクチヤ、トビノクチと唱へつるさきを抜くスメノクチヤ、カラスノクチヤ

戸口へさす

勝沼村ではこれ鰯の頭尾二ツを豆がらの枝にさしてこれを火にかざし門戸にさす

厄拂

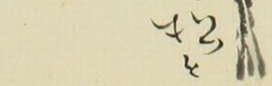
厄拂ひ

厄拂ひ方ハ別ケ条なれ共ハ厄拂ひ方ハ別ケ条なれ共ハ厄拂ひませうとぞ

年神送り

一月の初午を百拂いなる歳神を送りて豆木綿を結ひ

縄をを結ひ



ヨカンダレ

ヨカンダレ削掛の事を節分なるに西郡辺

今ハ掛る家なし

竿を高くかゝぐ

節分の日にハ家毎に長竿の先

圓辺ハ殺すなれど竹を格の葉枝

竹を切てこるくかゝ靜

とゝもいてもすぶ百ハ竹のみ

一月十五日のよゝメ縄もやしその灰を十五日の団子のゆで湯へつけて
家の四方へ出流の灰とて撒きちらすなり湯へつけて今そ
所ゝの部に四月を宮ゝ家ゝとて吟味とそ

ヘービモムカデモ ドキアレ
鎌も刀もサシテ イル
かくいひて灰をまくなり

子供が土間へ小便せんとする前のヘービもムカデもドキアレをいひ
て便を三度すゝて小便をなす女の子の前の方同じまてヲ
しハカジヤノ嫁ドンダ鎌も刀も持てイルと云て便をミなして
なす今ハる供もなきもの十年おいはよゝちゝとものとさゝ

正月雪ゝ家ゝ団子をつくゝモチバウとふすゝ木枝へ

一 まゝ玉の松にさゝかゝる十五の小豆粥へつけて食ふす

正月十三ゝ十四ゝ十五迄湯村の地蔵へ参詣の者多く甲斐
より馬車もて出掌る人おゝ地蔵尊ゝ年の数ほど団子を
ゝゝ供物を納めて地蔵尊ゝ供物にゝし団子を多く上げ命ゝを
す地蔵堂の柱に何者か狂歌をかきしてあり
小豆粥て団やゝ餅をいらぬ世話とて やゝの味さる

団子をゝゝ
モチバウ又ダン
ゴバウの枝
赤松へ団
子をゝゝ
ゝ赤ハ山梨の枝とゝ木皮紅色すゝ
小枝多くあり

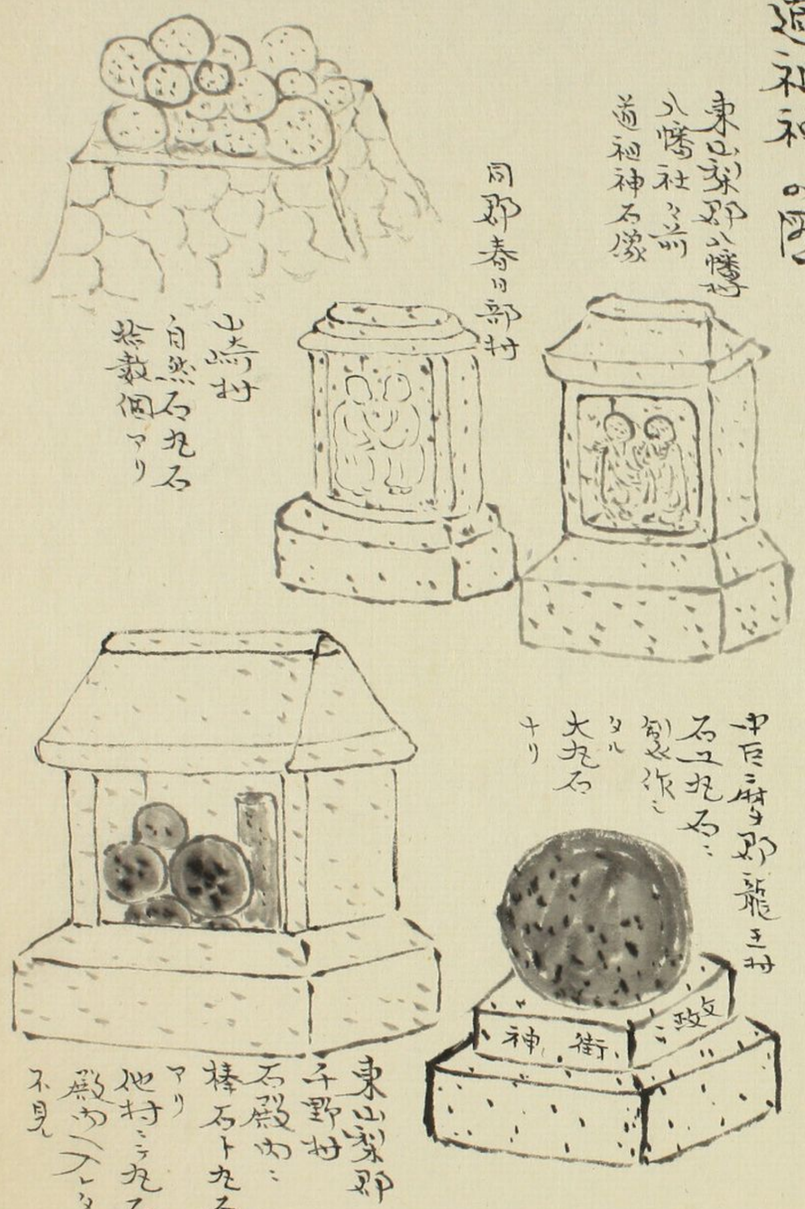
維新前ハ正月六日門松を夜明ふゝゝ子供ゝけんかのゝちゝ

道祖神

を多くそなへらひて手供せかの椿とせう言葉の訛なる場所なる
柳のとみどりのの土塔聖近道所辺ちらしと
甲斐の道祖神を一種無数の祭をて縄を新前ニハ甚だ
悪風行れしとふ現今を禁ぶせられて四のまくちらべとそれども
各村々ともに祭れる道祖神を本社もなければ
各村々ともに常に村社の境内又ハ村道ちらべ道祖神として丸石
数個をならべ置ちらべ宮もなく神職により
勧請するあらべ勝手にて丸石を拾い集て道祖神とちす
に石数ふりと道祖神をんがボコを持れれとる所方にて
は一所一社ありて常ニハ見世の底へ上ケちらしとそ甲斐国中
の総て祖神を集め金身所道山八幡社世ハ一社を造て今ハ
ちらべてあり

道祖神の神体

道祖神の図



六川大河村
鬼石さき
石祖神
七輪塔の
先きのとがの
ごとき石と丸石と二神の
石像のもとにあらべあり

大河内溪谷の
岩の東石に刻しあり

此の石棒を数本立て自然丸石あるもあり北信濃に見たるのも陽物と石を作りて石祖神とするもあり

普通に自然石の丸きを神体とするものを甲斐国中にてもとこの丸石の石祖神を祭らるるもあり神像を彫りたるのは格別古きを見かけず並湯村辺にて丸石のみ古き様に見るのみ文化文政以来なるものの

紙幣以前甲斐の石祖神祭を賑も盛なるが町家者どもの乱暴厚者共にて苦なる三月三日の夜に社を長持の上にのせ狐る頭を特別に狐る頭を二家々の見世先へ置て太鼓をおびただしく叩き立て賑ひ奇麗に飾り立て囲らせ相撲の者をあまたまねき起れば三狐る祝ひ〻〻とて囲らせ相撲の者をあまたまねきて十日以上石祖神の御幣竹飾りものなど前年中に婚儀せし家へ夜を入れの金銭を清水に流し金銭少なきを見ては強し年いつ論家具高値を毀ち乱暴なり町の長制をもどもやうやく十日以上十五日迄石祖神は無妻の者を多く拘らるゆへの乱いつらめなる婚姻がありてそれを止めると神の怒を受くとてとめるまちまちなるが十五日甲府町年番五人町々の

京形持参して来る〳〵迄一ヨカタ水アビセハあるべしなどの
書付（洞京さまを〳〵なれば）を高声に火ともしの方ハ一ヨあるべ
いとの事（京さまを〳〵あしとハ）ハ過る新婚者の家を囲ら
せなると見ハ今ハ甲斐まで流風殆全く廃たり

道祖神祭り諸村の風俗

維新前諸村の道祖神祭の模様を少たれハ記るす此地の
村々ハ新婚者を囲らせ祝後の家より金銭を強清す
る悪弊あるさまなること

甲中村道祖神

田中の道祖神　田中ハ甲斐より勝沢到る間の岩そ市代官支配の
地にて道祖神祭も地村のおく〳〵甚敷悪弊なり　由ちんど新婚
者を囲らせ風ハ地村と同様なれとも村名
者（サカヲ　ヨビ）云年中結婚せし家の座敷を道祖祭のヤマとして
長竿に五色紙の幣束をつけ玩具などをすゆに

金公場と村々に数多新婚者あり時々囲者等多れて其家々
にて幣の紙をこそ支度をする田中のヤマは長さ廿五間と云長
のにて（夢も申〳〵かくてもちがこれに関する一切の費用を新婚者の
家にて出すものなり）下段紙に新の年ひろ一本のヤマを建てに紙
竹木縄等にて拾両かゝりとかゝるヤマを十三日迄にたてゝ
柳を麻を二尾し囲者に添て市代官所の玄関（麻を流柳
にて拾式あ家の囲者袴を穿し提灯を持ち玄関にまでの上を右
いたらびこなす代官及代官役所の者玄関の上に座して獅子麻
の祝後を受く代官役が悔を述新婚者の家（麻い行〳〵新夫ハ
袴をいろし上下座にて迎ふ獅子ハ家（麻迄ハ右風をなし
て入らび他の新婚者の家（麻〳〵新郎ハ獅子麻他〳〵ゆくを見る

と任き先祖して他の新家を下さるもいさ下を
しいる者を迎へ入れ意地をなる者者は下る様をしてい下らべ後に新
家を困らせ或は下さるもさ下をさせ田畑の中をわけあるをややく
狐を無むと為者の中に道祖神一万度と云幣を持ち者
かるどの図をさ成まきと祝後が所をとい為者さ引取ち物
（寄留せ者い三年間の祖神祭の為者の小遣に使さこと
智に見し者も小遣に使さこと）

田中の祖神一万度
神と幣束の図

某老人の画かせし図

勝沢村の道祖神

紙幣前勝沢村道祖神祭為者年寄ヤマを造り高四
前に立て廿日をたるすることす十四日祭礼前に為者夜具をそ
し小槌を持ち面をかぶり福の神の形をなし新婚者の家へ

行き祝儀を求む出しかく少なき時は福神かぶりを振て受とる
新郎は種々家内生計の困難なることをいひて平にあやう福神の
受うんをこふ福神頭を振て間もなく金銭を増しややおも如
きれて立ち悪うんなる成なるどいていかゆくらるふをさび為者ら
は何にか為度を見出ち祝後を餘分にとらんと欲し何にもあな
を見おさめぬ弾更に吸物椀のもの（ままのざるを）れもあるを「馬デハ
ナイカイバ」がキモノハ食ハレヌ サア引トレ」といふと一同總立ちち
立ちもんとす中老とふ世話人と称文祝後を増加し機嫌をと
をなして為らすわくせざんさ為者総代ら為のる仇かしをさんら
かをんぬめ（機嫌を直りて為すこと）
八代の黒駒辺にて為者百人余を新夫婦の家へ祝い申

黒駒辺

そて大酒をたしなみ、連れて来る客人も迎に出て上下座して
迎へることなく雪の降積る元旦に雪の上へすはらせ困らせる
にて不仁久敷雪中にすはらせる為の道に一人寛く
と学み衣を始めて若者のそらび過ぎ終る迄無しかく時
いよいよ酒命に大酒を持たせ雪中庭へなげこせて困らせを
ありとぞ

赤地村の祖神

中郡赤地村にては十一日に若者集り若者頭千早をこしらへ（千早とは白衣かり服装の）道祖神のもとにもちて行ち牡丹の賤き者道祖神の前に
若者を招し麻上下をつけ供を連れ赤地の箱**草履**を引さつれ
祝事あり家へ到て上座に通て上下なる者いひもすい當年
八月出度年にて道祖神様もこの外のようこびちといいて

扇子一對をみやげとしてこれをおす使者が来る時に一家親族お
迎に出て上下座して使者を座敷へ通し丁寧にもてなす
隣家の者此時ヨトリモチと称へ（金子目録を持て道祖神の前へ）
拾圓なる者拾圓なる祖神へ金額身代の割に少なくと思ふとき
八頭を捧へ不知せず取持の者金子を増し道祖神のうちづく迄
致す祝して十四日にあると陽物の大なるを作り紅がらめつに
砂糖者の家へ持ゆくこれを花嫁に抱かせるまねをさせて
祝ひを済せど此家に来る悪まれていると花嫁に抱かせて二三
時間も持せをきて国らせるをあるとぞ

かさた村の祖神

東八代のかさた村にては元日の夕方若者祝事あり
家へ到て酒食の饗応を受け順廻して外の家へ行き地主と

客人等の手を洗ふ盥に水を入れ柄杓も入れ
悪ければ十字の祖神祭を因らせ手水を入れ
勝呂村の水あびせ　勝呂村迄行て新婚者を墓所へ立て頭より冷水をあびせ
づぶぬれとなす　客人の連に新婚者の家へ
（沢の新婚者の家）あびせて出る
けのこと祖神と客人とを送り
行かねばならぬ
道祖神　郡内谷村にて道祖神祭の時に供連れ立て
行くときダアサイナ　ドウロジンエ　ゾーサイナと呼り
祝儀をねだる　長さ五寸位男根の形をつくり紅がらの彩色
真赤なる棒につけて持行く　為し祝儀少ちがか又は銭を

与へる　赤の陽物の座敷へ投込て
紅からの彩色　角形　双形　長形
大国いてるるもの故に
投れぬ用心をなす
八幡村のキッカンジ　東山梨の八幡村迄行て　西田村に
「キッカンジ　ヨカタハ　ウチニカ　サワノカミヨ　ヨミヤし　モンセイ　キッ
ソロエタ　三十三本　ソロエタ　サワエタ　サドノスミデ　〇〇ノケヨ
カジとさ　薪木の勧化とゾふて　いて道祖神の前に薪を
もやすかけ　銭をねだりくるのなり
甲府かべの人数　甲府の町にて西田村に高り迄　祖神祭のため貴賓体
の者町々に詰め居て　猛者の者頭中又は笠ちがかぶり

道ゝさるゝと ヨンベ（幣束をつけたる竹の棒）にてあち無礼をとゞめ

幕

八日町柳町等にて道祖神祭の日ハ町内幕をふを引けりそれハ町丈けの長さの幕にて極細色にて男名所圖東海道々中記太閤記等の繪を画の長幕なりと

道祖神の縁結

稲積村にて道祖神の祭日ハ男女共一緒に詣ゆくと美人を婚ることを得るがおそれるとて良き縁を結ぶと云ふ道祖神ゝ縁結をなすそれ美男ゝふ美女と為初ゝ見立ゝ居ゝ

がゝ方にヨイノトヽいふんなるゝウトイノトヽ云ふ玉ふゆゝるゝがよしとゝいふ

道祖神のコンブク

東八代の黒駒辺にて道祖神のヤマヽさけなるコンブクロは村のゆゝのゝるゝて安産のなるあるとなる

皆三撃村道祖神の銭金

前に記せし新婚者を困らせ金銭を強請せし悪風北巨摩の村々などにては孫ゝ甚だ記事にもしも度々あれど其度毎に者方の勝となりたりしと其者ゝ年々道祖神祭に集めし金を積置て歳到事にもると其節の者ゝ賂金を贈り勝を得たりといふ

道祖神の寄附金銭を乞ふ

其者ゝ常々村内の祝ひ事あり家の子を惣ゝ出生婚礼其他家造りなど何にもあり慶事と賞めるものゝこれを知りて祝儀を乞ふ種と又家内に落度あるとゞゞ

ようなるねと賞ゝ乞ゝ

以ゝこの悪弊幸今ハ無くなる如きなれど或ゝ方に其弊風なる

道祖神祭のヤマ

東山郡笹方村道祖神祭ヤマ之圖

明治廿三年一月十九日見之

太縄を四方に張り五色の幣束を立てる丸太につなぐ

ヤマ竹の根元を尖らせる所

城屋所の先き城多の住む所まづ其の道祖神のヤマ竹が他所と異りて竹の根元を尖らせ中にうかせて地に埋めしめ四方へ太縄を張りて縄のすそをもたせたるなり

地へつけ引くとて引てたるに成るなり

しとぞ（城屋所のヤマ竹の根元を地につかぬ様にせりとなり）

道祖神祭の旗

現今道祖神の旗

日川村

御代咲村
木綿十反巾

道祖神の守札

道祖神ハ神職もなく別當さへなくちさい神社ハ公用の祭中又ハ神職いも別當代にもなることなく守札のみなら武村ハ板行の札を用ひなんどなき者の書きたるもあるなれ共ハ記へたるものこと

住吉村

道祖神靈

小井川村

道祖大神御祓大麻

九寸

あいと村のみ祖神

このれも戸口に懸へてあるたるもの

勝宮左あいかさ村田中尾の道祖神ハ石祠中箱一の盤くちものと祭日寒餞出拾四もなとふ信ゑて高人ゑとなす百人余もあるとて神体ハ錦のこれに包みたる丸石なり

アラマキのみ祖神

東小代村後村の大ぶう山のそそアラマキの石祖神ハ男根様の長き石柱なり

吳食村のみ祖神

左小代の吳食村せんべい寺の石祖神ハ耳一切の願掛ハ靈験あるとて梳のあるを穴をあけ元結を通して神前へつる置くこと

名主の功德

雖新災前まハ田舎の町ハ毎に町名主ありて一ヶ月三度役場を立て事務をとる扱ひ之とそ延等の名主の役料ハ一ヶ年拾両位なんど役德多く富有に暮しなりしと盜難届をなせバ名主の加判を要すの判も押てもらへバ手分をかさ也とか身代に應じ贈へきして印をとることなり又也所を買ひ其ハの名主の支配の下にあるゆか也面買賣の一割ハ極りて名主の取ることなり壹ハ千両の也所を買へバ百両ハ別に名主へ贈へきと

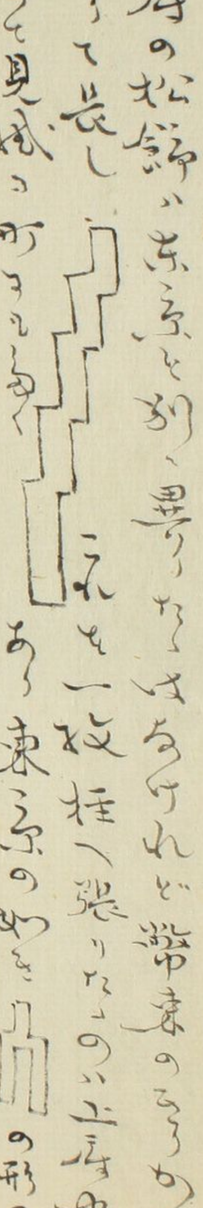
せぬぶるうべ支に又其町内の道祖神祭礼の為め五分の金を
出す心得を買ぬらぬぬ（千両の必所を買うにハ
千百五拾両を費すこと疑なし）

稲穂の図

右の稲穂と云ふものハ四尺五寸家々の入口の三定（ふるものに
て大サ五六尺より大きなるもあり）前図三ツハ中京稲積材にて見受
ずるもの武人の話に門松二本立て家ハいちぼう一本立て門松四本
立て家ハいちぼう六本を立るものと地方にて見ぬ（ざる）今ハ
一般まに致さぬと見へ（ざる）豊作を祝すること賞め（十日に作ること）
四月十日に田の神様を祭りて お田ろえとして田を五鍬ほど起
し松の枝を五本立て幣束を立て散米して祝すれば稲積材
にて見ざる

松飾

田舎の松飾は東京と別に異りたるさまなれど諸国のならわしもすべて長し



これを一枝柱に張りたるのみ立居中迄見て見ばいかにもあり

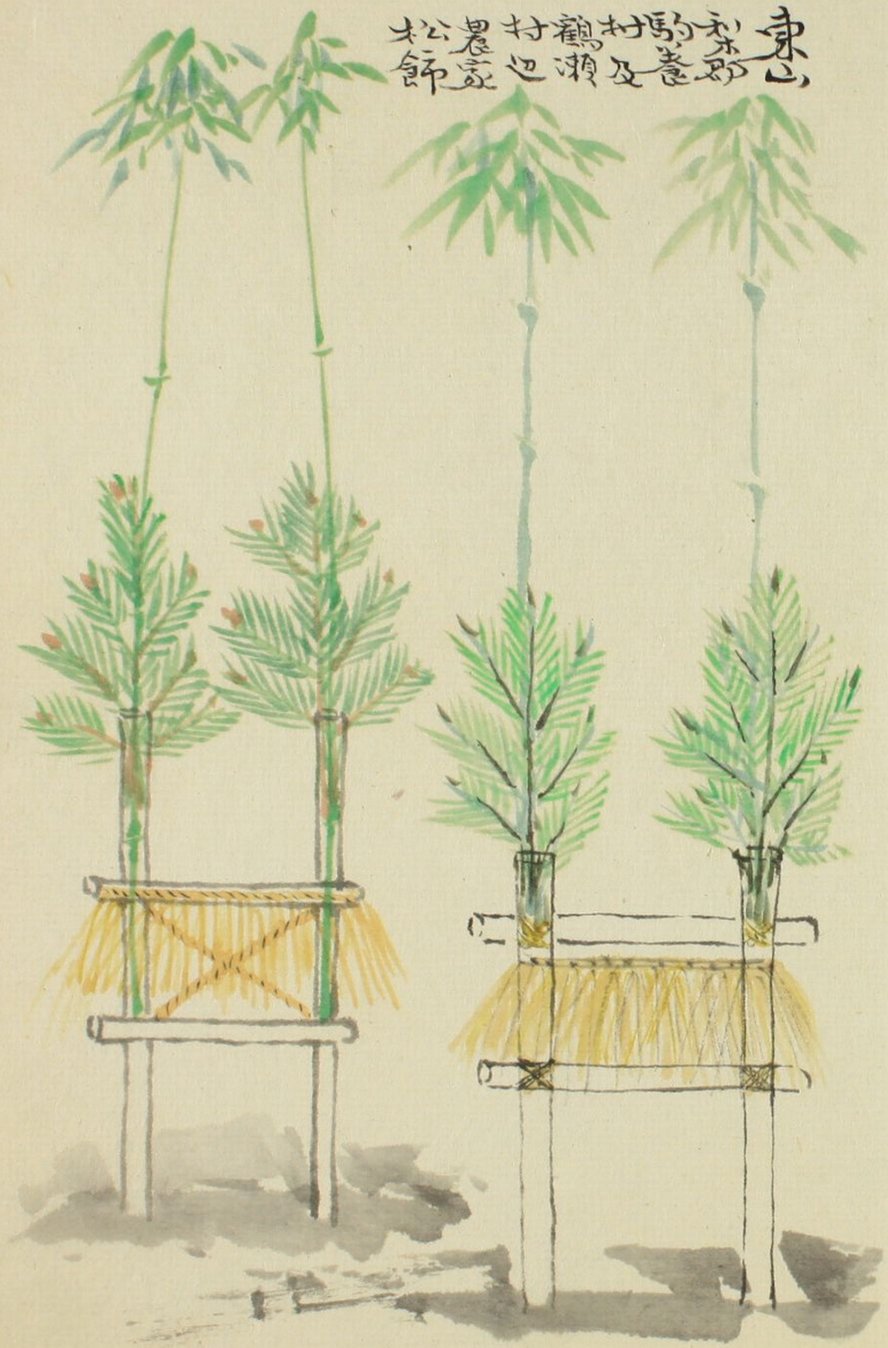
東京のめを□□の形のみメ縄にさせるを見ることもあるメ縄も東京のものとちがいぬ下に国せ一斗房メを二柱に下げ手けとなりて高野山村等にもかくのごとしけたり

柳の葉と戸びらの

四方梵天に用いる高日野山の初狩村花咲村辺を通らせしに柳の葉枝を一二本戸びらにかけるを見かけ節ふしの松のひくくなるかとおもへど高ふるものを見るなり

やの村

東山の松飾り



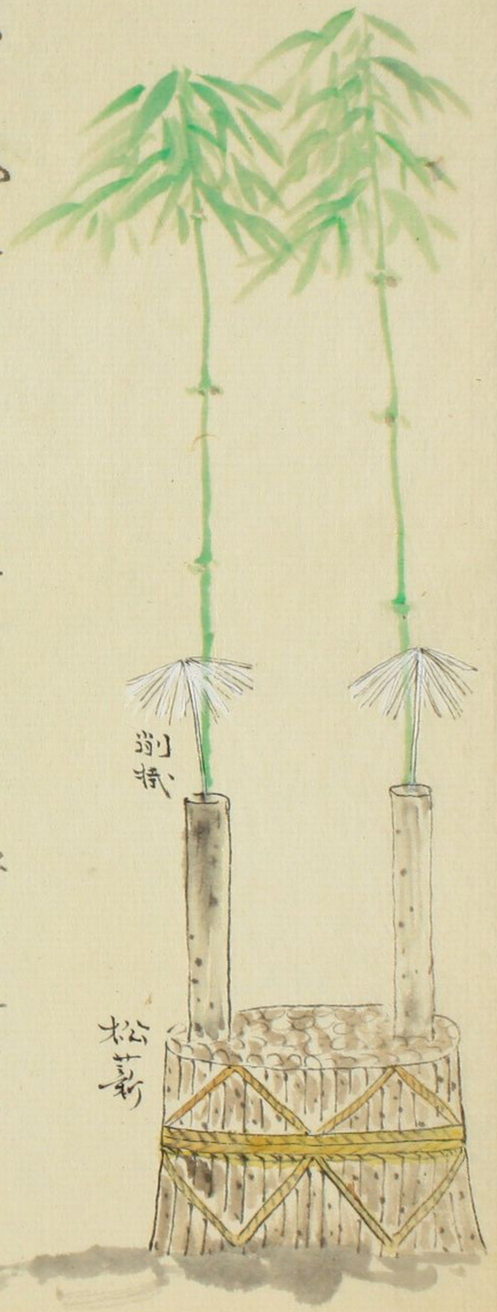
東山
森野
駒倉
村及
鶴瀬
村辺
農家
松飾

勝沼の三日

東山梨郡勝沼にて正月三日を初て祝ふ事家々の勝手なれども多くは牛房おろし餅を食し祝い七草粥には牛房おろし餅を食す

供ず

東山梨郡辺にて門松に毎夕作男が切り火を打て箸にて飯をまきみ松の枝にのせこれを供ずるなり



年神の棚

勝沼村にて俗信の年始に来る年神の棚を所々にもうけて早く棚をとる

初山

東郡の山の村にて初山と云て一月六日山の神の宮に詣り小枝を折り薪のかたちに結び山に供へ八日に山入せぬと折りて山の神に納めて後元日に取て山入せぬと折しいと今は十五日に山入せぬ

お粥かき棒

正月十五日にお粥かき棒と云て粥の中へ入れ粥のつくりかたをこめにて文らせ図のごとく棒の先きを二つに割て山芋を結ひて歳神の棚へあけ置き又大黒柱へまい玉とゆいつけ式の日の上ちゞ置き当代の頃ちゝ水

甲府近在塩ノ水口に立てあるかしかふ小川も細きものを本年の六月四日見たるの人

前図の如く苗を植付四のみ口に立て土を八こく盛り上げ水の入口に竜口を供してあり甲斐の清郎に社あり名を塩郎と称す

前図の如く苗を植付四のみ口に立て土を八こく盛り上げ水の入口に竜口を供してあり甲斐の清郎に社あり名を塩郎と称す

維新前甲府の育女奉行其他の役場年始に参るに育女の頭大門より玄関に到りべニカワヲカン年頭申上マスと言い置き今ここに育女の頭の名紅川おもんと云ふ名を申て年始に来るとあり紅川おもんの名詳ならず

育女の年賀

お鬱かき を柱(結ひ)

前に図せし お鬱かきを柱(結ひ)峠の甘酒茶屋を見れば左に図す

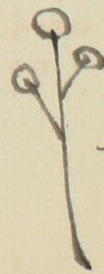
甘酒茶屋
柱に結ひあり

別柱は二段にあり

弱養母表の柱(結ひ)

鍛冶屋の仕事始

紙の廿四日の夕方に小柳枝（菓子の紅色なるもの）を図の餅とつけて柱に結びあるは神棚（供）あるのは木枝（三ツ股なるものなり）



甲府の鍛冶職は正月仕事始の時には鉈鎌鋏などの雛形を造り金山明神へ納めて仕事場の柱へ打付置くことなり

初午

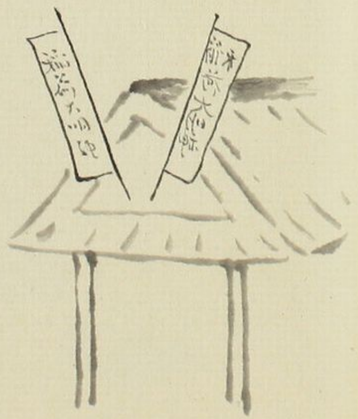
二月初午は四月時と同じく各所の稲荷と馬頭観世音（馬頭観世音は多くあり）甲府大田町公園の正木稲荷の中に摩耶下河東村永源寺の観音のみ諸村より参詣群集せり此社の若者は男女馬を美麗に飾り赤の長ぢばんを着し朱馬し子縄をも赤き衣服をかぶし村名を記るせる小旗を手に持ち太の神仏（馬頭観世音）

稲荷の紋幟

初午の日甲府柳町の家毎に赤色紋幟を屋根の上に立てるを見受けたり此日は見ざるの人此面白き家毎に稲荷の祠を建つるなり其ゆえ屋根（瓦根）参詣をなすなり此所の家の稲荷の祠に幟を立てるを見ず

正木稲荷の幟

甲府公園の正木稲荷（納める画）



至て古物なるものにて一反程（さらしと）の丹緑の無造作のものなり四寸豆三日間程下二丈四方の歳凡画

此に見らる

雛祭

三月雛祭り甲府にては別に横ぶとを立てふとも云ふ横ぶとは雛とも云ふものにて甲府の横ぶとは地に製造せり一名花さらい雛とも云ふ横ぶとは作らぬ由上下にて二重なる座しかるにて後ろに造花のこうがあるゆゑ花さらいとなるの名あり對にあるべし

ひしもち

雛祭の記し餅は九枚重にして桃の花をさしかざるを見る

カナカンブツ

三月十五日幟鯉を立てふふとなるなり カナカンブツと称する人形地國に見ざるものにて張ぬきの面を紙にて拵の棒の先へつけ雪駄にて鎧の袖のごときものを一段前へ下げさせ三四尺面の大小にて長さ七八寸ばかり

袋のごとき物にて日の出に鯉の瀧登り又日の出の代りに笹の葉にあらずして瀧せいこう真高の鯉をつけるあり又ゴミの魚の瀧を登るさまのもあり これらさカナカンブツの変形なり端午の前に武者人形を飾る際物見世に柳町辺に出ず四月端午になるもい武かるんぶつなりこれとふ

柏餅に代る

卯の花の代り

七夕祭

霊棚

端午の柏餅を贈ることは慶弔の代りに菖蒲の葉を用ゐ又茗荷を添ふ

回暦四月八日佛生日には一戸毎に卯の花を立て代りに茗荷の花枝をさすは此時のみも同じ卯花をあちこちめぐらす

七夕祭竹を立て五色短冊を供ず

小麦をすこしを茄子豆等を供ず

盆の霊棚には竹を佛殿の左右に立てず蓮の花を画きたる燈籠を

ちゃうめんを用ゐべそばを供ず枝の葉のまぜがきをする

真こもをおるおがらをまこもいとまぜがきを作り小茄子にて牛馬

の形をつくり鉾に牛の葉をつけ蓮葉の代りに茗荷を切りさいの目に

きりをつけみそ萩を水面に用ゐ十五日には餅をつくり供る佛殿

の左右におがらを立つ他は赤ふふのをきる

葡萄の葉盛の

勝沼村辺にて盆中佛前に食物を供るに蓮葉の代りに葡萄の

葉に盛て供ず甲斐国に蓮を生ずる地なくなりけんか芋葡萄の

葉が蓮葉の代にさるなり

馬鹿鞭

回暦七月甲斐春日町に高鞭と云る家あるを見る牧の葉を

つけたるのもあり

高鞭を見る

七日日と十日夜

維新前にいい七日日(ナノカビ)と云て七月七日の夜は公に畑物を盗む日

と人の畑へ言て大根牛蒡豆勝手に盗むことを

云いゐたりしとそ甲府の近在にては八月十五夜に人の畑物

を盗むを咎る者なし

土用の丑紅

京にては寒紅とて毎年丑の日に紅を買ふことあるが甲府にては土用の丑の日小間物屋の見世にて紅木綿の嚢を売る竹の先へかけて丑べにとて高く売る

虫送り

千塚村虫送りとて毎年七月廿四日暮方に長き松明を見物に行く村人多く数多に指す大鼓に先達の者ヨークレ ヨクレ イチノムシヨクレ

と呼ばれば一同連れ村はづれの地蔵堂に一同松明を集め焼捨てゐる村々にては日を異にすれども送る方法同じとなく

針供養

四月八日に針供養とて針仕事をする婦女を休むべきこと

月見の団子

十五夜の月見に供する団子を白粉にて丸く米の粉と盛り上げたる上へ栗・柿・蕎麦・芋・豆・薄・芝・萩・菊・葡萄・柿・石榴等の果物を供し又煙草の野菜ものを供ず十三夜も別にもてなす

高尾の塞銭

四月十月の北巨摩郡の高尾山参詣する者多し社の塞銭を借りれば高尊繁昌すと信じ百文を百回一文を千回と して社殿にて供りれば増して倍に返す百文即百回なれば二百回と倍に返す近年そこばくの貸さるべ 百回以下ときく多く借りて返せども未だ聞かざるしと見め

石殿の墓

甲府及浅村の墓地に一種の墓あり石造の殿にて二体の地蔵を

中央に見る古雅なる石碑は
墓に立供の墓に認めとうふも
此数のものと見る
此むく二体の
此を
毎年八表の縁に用しまるものなり
この石のほとらうさ三尺よりも尺、ミ尺、
後に見る鐘と中との三ツ石まで表面のスカシ
よりわの此もとるを好まれなり
此ものなり
此ものなり
鬼面のかたちの図
大きなる宗三尺程の墓地にてかくの如し
墓図し

前沢の石仏群なる地蔵尊の無縁となりしものなるべし

地蔵堂に納めあり

三地蔵の石燈籠

四角及び丸形の石燈籠の六地蔵あり是亦古物にして

面白きものなり元禄九の年号を見る

三地蔵

又四角の火袋中に六面六体の地蔵尊を刻し納めたるを見る

又一種の小下に同じものを同じ形の

彫し火袋の中へ入れて笠石まで

笠を除けたるを見る三種ハ燈火を入れ

四角及丸形に彫て見れば六地蔵ハ六体別々のものなれ

一石に横長に六体を彫りたるもの

一枚石

一枚石

一枚石

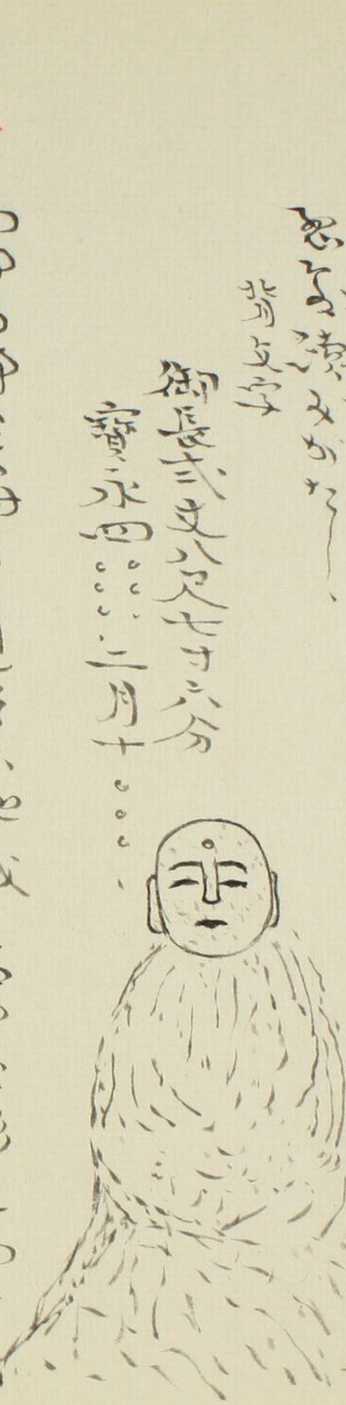
此ハ六角石を火袋の中へ入れ地蔵尊の
ぐるゝ燈籠となりたり

三ツハ文字の間の彫あるものの地蔵
年号ハ元禄にあり

東光寺の大地蔵

甲府東光寺の大地蔵は同然石にて大なる地蔵なるのお首と
の大石地蔵にて一たるものにて背に文字刻しあれども石苔
密生して読みがたし、

背文字



御願主文八郎七郎六分
寶永四……二月十……

八茶屋の六地蔵

南都留野八茶屋にて見たる六地蔵は石の屋形の一面に三体を
刻し横面に二体を刻しかるんが地の横面に一体をつけたるも
のらんが横面をも見るにも殆どして過ぎたり

笠取の三地蔵

甲府五郎坂の觀音の背に三頭六体の石地蔵あり大なる三ツ
の地蔵の首を刻し頭より下にいたる三体の地蔵なるを造りたる

地蔵にて見たるにて一石三面

六体地蔵

東山梁野川内村也馬頭観音の石像

馬頭観音

塩山の地蔵にて見たる

松原村の
子あり観

川内村にて見たる

石地蔵

東山新宮の墓地に無縁のまゝ地蔵の石塔を見たり甲府善光寺ゝわるゝ田畑のもの一基あり

味噌地蔵

甲府一連寺表門ちかくに味噌地蔵と云石地蔵あり願者地蔵のからだ〳〵味噌を塗りつけおけば願者の病みなをるとの事

柏尾の地蔵

石仏すべて信濃の絵〳〵ぎあり

正徳寺

地蔵の背に刻したる文字が正徳寺四月ゝゝ八日八郎ゝゝとあり三尊天形ゝ夢の赤色のとぐん地と

いふの頭巾を納むる者なるべし

東山梨郡柏尾の柏尾寺は古仏古谷を蔵す古ちり寺に制作

子供塔

古雅な三座の蓮華なる〻今のものと見へる石地蔵本堂にあり

甲斐の子供塔ひい古風を多く立塔堂ゝ多きの材料なるべ〻ものゝ多れば見聞せしものを記す地名を書せさるは甲府の子供塔ばかり

雨降後すべよき石を拾ひつゝ

油石コイヨ　油ツケヤルカラ　油石コイヨ

冬季に火事を見て

山火事ヤケル　天道マデ　ヤケル

まい〳〵ゝゝもとて

角ゝダセ　メンジョ　ツノダセ　メンジョ

螢をとらんとする時に

ホカタルコイ　山次コイ　柳ノシタカラ　枝ツイテコイ

仝　北巨摩郡逸見地方

ホカタルコイ　山次コイ　行燈コベラデ　火ヲ燈モス

仝　東山梨郡勝沼辺

ホータルコイコイコイ　山次コイコイコイ　アンドノ光リデ　水ロヤコイ

コイコイ　（コイコイコイと早口にいふ）

子供が螢を呼ぶに　ミヨミヨと早口に呼ぶ

北巨摩の人の話に　昔に赤き線ある蛍は光りよくもの　山次蛍

といふよし

四月十月頃　おらんとて　小豆をとらんとて

雪バンバ　雪婆ガ女　雪ヤ　ミヨッテ　ヲデヤレ

東京のお手玉は四角なハさらふとん様にぬい中へ小豆を入れなるものなるが甲斐のは三方を縫ひて一方をメてくり袋のごとき ものをお手玉とす

袋を逆にしたるもの

お子玉歌

コヽコメバラ　サイタカドン　天神弓矢ノ松原ドン　オエドノ

ヲ花ガサイタカドン　タツミヤノ　ヲウラノ　バラガタン　一ト枝

ヨクレ　吉野サン　一枝ヤルノモ　花ジヤモノ

仝　中巨摩郡稲積村辺

ヲ子ンバ　ヲ子ンバ　ヲ子ミセ　ヲ子ミセ　サンド　シイト　ゴトバノ　ゴトバノ

ヲーゴン　ズンダエレ　ソマイレ　マメヨーイレ　タコイレ　ヨシナグレ　ショ

手球歌

一トゴマ 二タゴマ 三ィゴマ 四ゴマ 五ッゴマ 六ゴマ 七ゴマ 八ゴマ 九ノゴマ
十ォゴマ 十ッヤノ バアサン 三ツ子ヲウンデ 一トリノ子ヲ オ茶屋ニヤッテ
チヤノ ベイキセテ チヤーチヤー チヤーヨ モーヒトリノ子ヲ
ウルシヤニ ヤッテ 添ミカブレテ ボヤ ボヤ ボヤヨ モーヒトリ
ノ子ヲ 紙屋ニヤッテ カミヨ三枚 モラッテ イマハヲカイテ ドン
ドノ道デ ケンカガ アッテ ケン ケン ケンヨ
女子二人 相對して互に 学をもって
ヒートテ フータテ ミシ ミシ 三ツデ(学ヲ三ツ もッ) オホ山吹ハ ハヨハヨ
サガシ サガシ サガラヌサキニ ハヤリガササシテ オホビヲ ドンス
ノ白ムキデ ゴザリヤ ゴザリヤ コンヤノバンハ ホタルガ クルカラ アン
トシ トボシテ キクダキヤ ヨイ ヨイヨ(三ツ もッ) マツダキヤ ヨイ ヨイヨ(三ツ もッ)
羽根をハ子コ ちよばぬを ヲッパゴヤとつ〳〵

甲府及村々所用羽子板 二枚

長一尺八

裏

表

裏

此外まるのさるぐつを画きたるもあり

鬼ごっこの鬼となるは蓑を負たる者が鬼になるのがつねなれど
ズイズイズッコバシにて鬼となる事もあり

ズイズイ ズッコバシ ゴマメデヅイ カラスミ ラワレテ トッピシショ
ヌケタラウドン ドッコイショ タワラノ子ヅミガ コメクッテテウ忠
助ドン ドッコイショ（終のドッコイショは鬼となる人をさす）

鬼に當たる人が嫌ふて仲間よりぬけるときは子供仲間同音
に「鬼ニナッテ ヌケル者ハ提灯袋 クソ袋」と云て賤しむ
手球又棒等を拾ひて遊ぶ時云ふ言葉

ヤマベノ ヨッテヤシ チンチリ イッカンショ

子供蓑をもつ撰設「ソンヨ ソンヨ」と云ふ
子供の意見別に逆ハ卦草履八卦と云ふ二法あり子供仲間
の中に誰か物をかくしたりなどの嫌疑起るとき罪人を

見ちがえて先づ子供頭の者仲間を色のぐるりに立たせ左の掌に垂をかぶせ右の掌を以て打つとつぶるるの多くは右の方に居る子供が罪人と到定されるなり又る供仲間の草履を片足づゝぬがせ一ツに集め一人の子供がそれを穿へ拔六ケ敷るときに草履の裏が出たるのを罪人と定む

子供仲間何か問答いさそろと笑ふ〻〻ときこえに對してかく

「マテガイ　キテガイ　江戸ニモアル」

ふ

はじきそろと欒子の實を地面に指を降こ掌たるを取り

廻いあり此廻をあるす室内ふるをせべ往来又ハ明地ヨリ設す

にむくの實をまく時二ツの實、密接し親指の這らぬ様に指をまば

そふ弾く前こ二ツの實の間に指を入れ地に線を引き子バとなら

ぬを示し置てまゞ〻弾く食指を決てまく〻をせべ必ず

親指を以て弾く又むくをまく時に二ツの實觸合て子バとならんと

すゝときキウと様聲をなす

郡内地方にて七八方の女る五三寸の細長き扁平なる石を平なる石面

二ツのまゝ石の上にのせまなる板をなるに置なる様ヨ敷し其前に膝を

つき坐し右の手に四角のこの扁平の長き石を持ち扁平なる石の下へ

拔ケ左手を以て受け莫石の石の面をすらせて右の手へ拔通す拔通すご

とに拔石の上下の石面をこすりてトントンチョンチョンとひゝき甲斐縞

機を織る音をなす機織を似ぬ遊びゆゑ拔の通す子をなるさし

よろしきをもこさけり

竹馬のことを　メカアシ　といふ

凧は五月にあがること　ます

マゴトのことを　ウカダッコ　といふ　甲斐方言に妻をヨカタといふ

ウカダッコさ　おかみさんこと　ふこと　なるん

、　此の童謡は近来のものちんぢ　こ　梁人気　訴訟事　と　如のさもらる

山梨縣の裁判所　負ケテモ　勝ッテモ　コンキリ　マケテモ　カッテモ　コンキリ

、　又　供連れ　立て　ふい

兵庫ドンドコドン　吉原ドンドコドン

、　これも近年流行せし　蓙　なり

ターヨ〳〵（親指と五にちなむ）　蛇の目トカケテ（親指ト人指トスボウ丸形キモ）　三カケテ（三本指ヲ出ス）

四イシクデッポウ（指四本ヲ出ス）　ウサイモ（ウサギ出ス）　スイノ〳〵（手ヲ五ニ巡ミグル）

スイデッポオ（石トカ鉄トカ紙トカ勝負ヲ決ス）

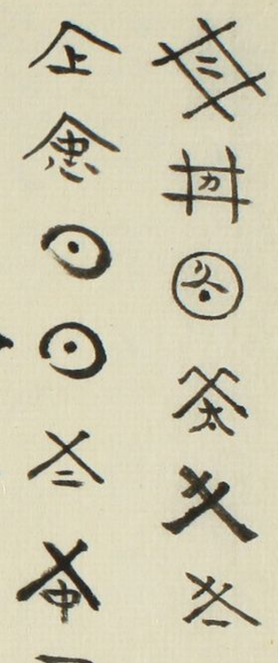
、　又　童謡　〳〵　〳〵　しらたいもん〳〵

。東京　シンキヤウ　写真鏡　アタマノ曲ッタ　巴旦杏（ボタン　キヤウ）

。みかんきんかん　酒のちん　親がせちのん　子がちちのん

暖簾印

甲府高家暖簾の月印



蕚の外に松の紋をつけたるもあり　アロ　タマル田　たなど祝意を込て用ゐたるなり

迷信の類さまゝ種々あれども其一つを記せば

足なゞ赤色の班文ふと出来ることあれば雷憑神がつゐたるのなりと

熊蜂の巣を戸口に掛ると魔物を除の神を這入らめとふ

七夕に供ぜし五色短冊を紙包に致し　七夕様　とかき戸口に貼置ば盜人這入ることなし

あさび貝に供ぜし三八宝と書き戸口に掛ると疱瘡神這入らめと

東海道五十三次の図　東海道五十三次の宿場名を書き、さかさまに張る張る張る

さかさまに張るのみならず書きて逆さまに張るが甲府の火防の為とする

「ひめでかさ　ゆきもそ川のえんれんむ　人をたよらべれるそらいの神」

南部当郡青田辺りでは面馬頭の破片を戸口に掛けてある
成田社へ納めて古面馬の破片いて慶徐恵病徐とふ
一日に二度入湯すると嵐の小便をしかけられると一日も
入湯せんとふ者あるとわかるとて平ぐます
鍬を投るものではない
糸くりをくを頭のせるものでない
紙の中へ這るものでない
箕の中へ這るものでない
まふきで人を扇ものでない
女が男をまたぐものでない（男ぐとなる）
養蚕中は嵐とふものでない嵐のみと養蚕中は夜の
お方とふもの

ヲモッセイ（大晦日）の夜は戸を早く閉るものでない（もかは戸を開きておかなければと）
正月三日昏前煙草を呑ものでない
元日に針仕事をするものでない
針供養の日に針をつかふものでない
蚕の中へ湯をかけるものでない（湯は鉄瓶又は茶がまにてかけるものとかまを用ゐる）
ひしやくで水を飲むものでない
日暮後にかくれんぼをして遊ぶとかくれ神様にかくれる
からすものでない
著と著とでまさかふものでない
揚枝を一本人にやるものでない
蛇を指示をするものでない 該て指さして指を輪をして三度
輪をさらってもらへばよしと

産明前まで生れ子を産れて橋を渡るものでない（産あけ
とき男三十日女廿九日三ッと産明とも）

八月十五夜の夜に橋を渡らずして七軒の家を言ふと用（
供ぜ）団子を盗めば長者になること

一ッ星を見つけると長者になること

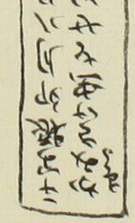
甲子月夏の或日の戸口に張るものい
の四ッ書くこと（のあり）死ぬ深く意して四除の字
かと思ふ

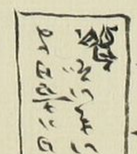
除除
除除

紙に淡
きめるもの

ぶこ月甲の農家にて見たる千早振の虫除夢の夢迫のとき
書くこの四ッ書くもの二ッあり

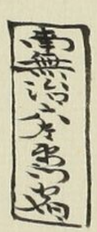
白の字三ッつけたるのと虫の字と
加へたるのと
二ッあり





下田野定名馬の孫

稲門村にて見る

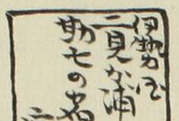


無治六年馬名

廿人町にてかい

鬼子母神
馬
三十番神

桶屋町
赤紙



伊勢国
二見が浦
助七の名
定名

南都当郡
末生村初
狩村辺
赤紙にかき
てあり

天竺の大野四郎名

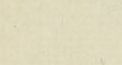
甲斐稲門村

明治廿六年七月黄日うり
鎮西八郎為朝名

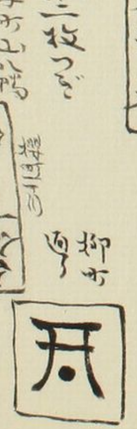
佐渡町の振下

三月
切の
三
月の

赤紙二枚つぐ
金子町山鶴
とくまあり



柳町
三月

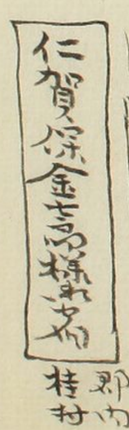


一り船清次郎家

並潟村

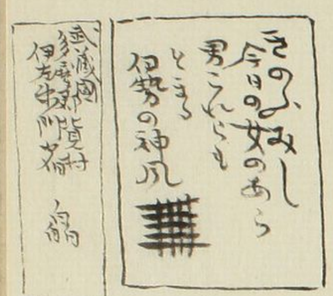
伊勢国
二見が浦
助七の名

南都
当郡
末生
村



仁賀保金吾高橋名

郡内
特村



左

四ッ近辺の
角にて
見る

馬驅 甲府

馬 今

大坪 馬驅 東所 今

馬驅 今

馬脾風涂とふ
無のものゝ中ゆるまり
見様〻赤紙に馬の字を
品字形にかき掌を墨にて

明治廿四年の二月インフリヨンザア大流行せり其風邪発熱のねに鼻
（赤色の班文をもつものゝヨリメ風とこゝろ海とのうをならん
かゝる流とつゝ〻おそるべの情人久松をもたい男とのりんが
〻〻久松ゆるやちゝれがおそるべ風もつこまめと思いて
戸口〻久松ゆるやと書こて張〻なる家〻あり〻

ひさまつるす 横近 匠所

久松不在 谷村 黄い郡内谷村より特村の暮也迄て張〻ものもの

久松風 横近 匠所 魚所

おそゝめさん 久松作日本東京 ふたりでのこゝ たよ 作ハ昨の誕生日と今の まゝ 特村

久松ゆるす 谷村

久松ゆるす 谷村

久松ゆるす 谷村

久松ゆるす 谷村

久松ゆるす 谷村

佐々の三八名 今

佐々の三八名 甲府 疱瘡除とて甲府にのみ有る

鉄騎の古がねを戸口〻かゝげなるを三枚所及郡内特村にて見る

無地に左巴つゝ 甲府

荒川小流に多つゝ 甲府

何の物 甲府

神楽湯立の笹の葉 平成蟹の甲

神楽に用ゐる弓矢

木太刀

矢の穴ある金的

鉄炮玉の形なる角的

鉄の頭

椰の葉

番椒

屠蘇袋

何年の男子

赤紙の袋小豆三粒を入れたるもの

鮑貝〻佐々良三八船中にて鍋中ハと書たるもの

蒜を赤糸にてさげ

霊芝をつる

猪のこかをもて

つめ〻ゝとふ草をつる

等何れも戸口〻ものもの

甲斐の河内に就て人数巻の金融誌第四巻第三号に予の解説を
記載し置たれば茲に略す

白壁を嫁入

八代郡の一宮の田村より北に当て白壁の家を建て火に
なりとて白かべに外部をぬりたる人の居に三軒の土蔵のみ白壁なりと
村を過ぎて人の居に三軒の土蔵のみ白壁なりと

豆まき

國立村にて豆を撒て昔氏神梅田の小道を歩行
時誘て豆につまづきころびたるを田の主怒て薪にて足を
打たりしと共事なり豆を供らべとなり

芋を供ら

東山梨の小納谷村字石森辺にて芋を供らべ昔しレイラボッチとなる
大力の僧ありて二ツの山を芋がらの持て来るの時石森に
て芋がらを折れ山の一ツ石森山となり一ツ塩山になりとそれ
ゆへ芋を供らべと

地蔵の石地蔵

北巨摩郡風凰山地蔵の地蔵石の辺にあり小さき石地蔵
多くならべ立り子供なる者此地蔵を必ず
子供をもつと祈願参りする此地蔵を一体借り来り必ず
供にして納ることなり

地蔵嶽参り

春の彼岸に此地蔵嶽登山なるものあり山上の
石柿木と五葉松の枝とを折て持帰り戸毎に分配す
葉を一枚燈明の火に入れば火を清めて清火とする
とて神仏に供する燈明をともすとき此葉を入れる
又此山に登る者は長さ拾九丈二本をゆりて持帰りたる
現今は維新以前の縄を九丈を拾ることを為めに
九丈を持来る者なりのみなれど拾度の先をいつも

あふ嶽々〜土鈴

なる細丸大の長きを杖として持参する者を見たり

冨士あふ嶽今興桜神社の参詣あり又あふ嶽の新道に名高き景色のよき地なれども殊に山猫なるものもじゝ蹠足がてらなる者多〜あり土製の鈴を賣る者多〜見世を出し居れり天保大和地方より鈴を送り越せしと今は甲府にて作れり鈴の大さ三分ばかり一寸位のものもあり丹赤及金色と柿色の三通りあり虫除とて子供の腰へさげさせ置く者あり又火消とて自在竹へ結ひおくものもあり

あふ嶽の土鈴
虫除の文字あるさ迄以類なるもの他にふるくあり

裏面に除の一字あり

スモジ道

北巨摩郡穴山村内宮石水諏訪明神の社の祭礼は三月廿日ひと賞〳〵なるが社日さへ鈴を鳴に行〳〵と曲りあるとて社迄道路なき畑の中を眞直に畔をみちとし畑の中をあゆみ来る人さへ一文字に歩み行〳〵こゝに諏訪明神スモジがあ好だいらさまに行とゝ〳〵スモジとは方言眞直を云ふ

鉄の形と紐の

里俗の神社〳〵鉄の形をもつぐを納めるとあり山梨の麻利支天岡部の山梨神社市川の神社もこゝに強に多く納めあり機織と裁縫との祈願者の納むるとゝ

シビし湖八幡の安産守護

市川大門村より山〳〵を一里余シビし湖とゝふあり富士八湖の一なり湖より下り廿丁程にて村あり村の婦人出産後三ヶ月ゝ

世下も參詣絶せず湖水を下へ流れ清めを例とす湖
辺八幡神社あり安産を願ふ者多し絵馬の
始まりとなり田原辺の者も社前へ祈願を掛
ぬるとあり
底を柄杓
底をぬきたる柄杓を納めあり
附木を下間のごとく形ち曲捧
を通しひしやくの底をぬき形ちを見たれば一老人に問いたるに
戸川大河村桃林橋の辺に地あり其処に義光明神のふ社あり社前に
穂のつきたる麦一二本づゝ掛けあり
今日は五月の日なれば麦かりを始め鎌入れをなす日なれば
初の麦穂を明神様へ上げたるのでありと云社へ穴あり
と称の底へ穴あけたるのを多く社前へつるしてあり社老人の
ふるまこれい者當でいあるまも四に穴を明けるのが本来

義光明神へ初麦を供ず

なりと云
田原辺三段田村の日蓮宗のさるに妙法二神と答あり社前
いも底をぬき柄杓沢山に納めあり安産祈願の為と底をぬき
ひしやくは水のたまらぬゆへ底ぬけ柄杓のごとく安らかに産をする
すを願ふ者多らんか
北巨摩の八ヶ山嶽へ八九月頃に登山する者あり山嶽の者は山上の石
楠木 意い松の枝を折りて来りて火焚の上へ結付ける火法の守
りとす
中巨摩郡諏訪神社社内に祭りとあり
宮祭のゆか名づけのゆる祭ることく
見め他の神社まゝ見樹ごとく
生児名日の時に井の祭紙のごと

底を柄杓

八ヶ嶽登り

名付紙

明治五年二月十日誕生
主長九郎望性長男女
一賀名 中島きよみ
如松柄茂

東山梨郡
美山嶽の
或家にあり

土性男
初名 初太郎
鶴亀無量

木性男
一名 ちよこ
子孫繁昌

家のこ重へ張置き来客にあらまし
風流ねぶ流行すゆゑ村さづんと
又に洗米を撒ごろ
縄を引張五色の幣
束をつけ風流奈を
ちすこ高い大こう村に
てこれを見たら
必ず見かけべ

神酒の竹筒入れたるもの

幣をおさごさてなめ
石を重りとせこ

甲府荒川
三ッ水門にて
雨乞の図
安政年六月十日
見る

一蓮寺に左甚五郎
作と云ふ龍の頭と
云ふあこれを荒川
の水中に入れ
置なれて供物を
なし鐘大鼓をも
ちかゞり火をたき
多人数の祭いとなる

東心梁郡川浦に大嶽山の立枯大木（紙幅数百本立たるを見る）

甲府にて神々に供する木鉢のこれらものを用ひしなり

白山權現（場地を納めてあり）疫病を止める願掛なり

中巨摩郡十日市場の地蔵毎月市神にて市なる事あり木具を賣
さ見せるなどで高人諸方より来り繁盛の市なり福徳にて木徳をなる
者多くあり大小種々あり

甲府の般治屋の話に甲府にて新く家を建るときは地鎮祭の
為として鉄にて目方百廿匁位の玉をつくり長さ七寸程の力と鉄にて鏡の
形を作り箱につれ大黒柱のもとへ埋むと

井戸替をなす時は呼水とふて柄杓に一ぱいよろ水を井戸

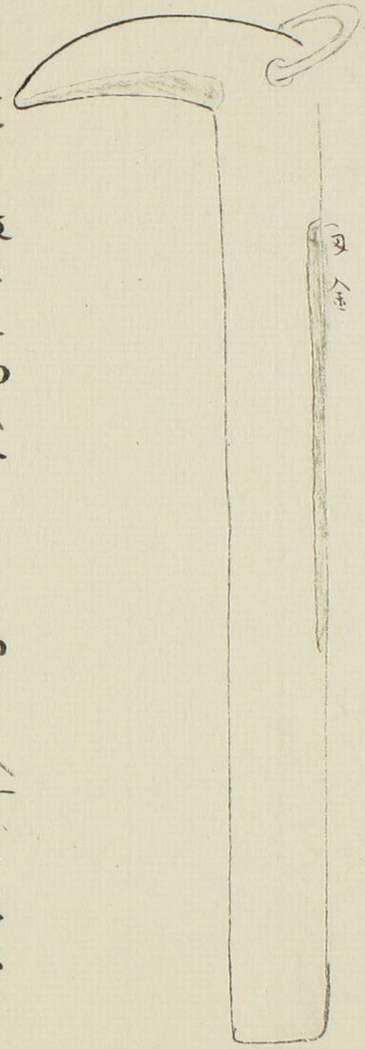
燧鐮

提灯の紋

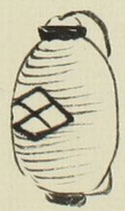
ほろろく

へんこうこうす

燧鐮　實大　駄馬をゝ者皆この火打鐮を持て



甲府の提灯の紋は正面へ一ツつゝ横面へ一ツつゝ横面にあるこの提灯の紋ハ一ツゝ定れり横面にあるこの一紋見ゆやすくするゝ様に巻てほろろくは東京にて巻り立鍋の様に造りたる丈夫なる雪さき土器にてとろゝが内へ向てつゝたるのゝまたゝに立てつゝたるとの

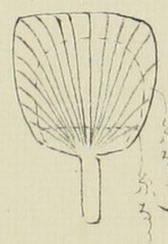


ほろろく

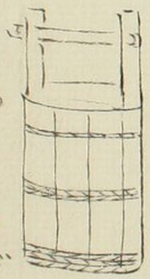
二ツあり

甲府のほろろく

内へ向て取手のつゝたるさたゝ火のためにあつくなるゆゝとろ



甲府の桶類ちがの様子ゝ東京のゝとゝあゝ子桶の箍さ三段にかゝれり上に細きちがゝ小判形のものあり面倒に丸形さんぶちにて被ひかぶせにあゝゝ又平桶ハ丈夫に出来てものゝとゝちがゝ立ツあゝとゝ二ツ用のちがハ徐程大きちがゝて樽の太箍のゝ樽の太箍のゝ同じ



桶

太さのもの
甲州名物の部
甲州甲金四角著　切り破風造りに三併ます　ヲコレ
御仲居　ナカウ　コナカウ
（ヨロ）ハ浮ふそば（御仲居）ハ女房とも（ナカウ）ハ三併の八分の一（コナカウ）ハ
三併の十六分の一

藤崎俚謡
藤崎名物こぞんじあるか穀屋が多くて奸猾で親がさきて
子がぢふい姫自まんで縁遠い姫自慢ハよけりども
馬ぐそ水で飯をたく
甲州の梅女さきやれて居ると
お田梅に腰の鏡とんでーて　おさよりもんちがヨッキヤて

見る

甲州の方言は地方くいよう小異あって地方の方言もて地の地の
者と同じくさこそすんびに背摩地と都留郡などの東京に村人
の言語さとて地の人の理會しあたらぬことのみちく紛のぎき
甲府にてさイザルといへど甲府にてさコンドウシといふ紀に
おすさくとふ云ことふ語も甲府にて　ヨコシテといへど背
摩の地見地方にてハ　ヲックシテふぜ同じ國にても七八里にて
著く方言及言語の異ちるあって地國人にハ解せぬこと多
殊に女の話しさ聞くんぬこと多く初めうさ外國旅行の様
にて困ることあり

北戸摩里の者の言葉さ略語あり其言葉面し面白し
ケサアナー　アンドンデ　メシー　クッテ　ヤマヲシヨイダシタ　十一ヤヲ

ノミタシテ（充分ニ飲ンデ）　村田ヤ（茶屋ノ名）ヲ　カヒコマヾシテ（買ッテ）　ケヱリニ（帰宅）ノドガ
カユータカラ　フチデ　ミヅヲ　サンバイ　ノンダ

これを認せい「今朝は早く行燈のあかりにて飯を食し新橋のひとゝ出で田舎（到り土産をとうんらに成とのみきよう村田屋にて菓子を買い帰り道にて渡し船をのりたらあとを三杯のんだ」とふとをちゝ

小女の話ているのをきくに早こと

コヽへ　桃ヲ入レテ　ヲキンセ。コヽヱコレカ。サヽ　ミシナコヽノツイレシ。

ベニノ色ヅラカ　ナニノイロガシジクリモンカ。シックレメ。アタマノ

ツヽカヽッタ（決せざ　ここへ桃を入れておくこと。みんなこと　紅の色がしら何と色がついたのでさなら。やってしまった

あるまじきわざ）。

容易に怒る人と東京にてふ岡山の人なぞふゞ田舎

にてさかうぽい人を（ハジカネズミ）とゝ　ハジカネとハ初鹿野

とゝ　ゆゝ焼出す（ゆゝ　ハ　悪なるようちくちくなる

又思附のせきまを心棒が出ぶ（ぬ）ぬ　ふのを田舎野の

いてさ（ヲノ男ハナニヲサシテモ　ジクハナイ）とゝ　ジクは軸

車の心棒ちんば同意ちんばいい　又

京にてあの人さまるで油紙に火のついた様にぺらぺらやゝ

人だとふを田舎にて（アノ人ハマルデ　水ノ葉ニ火ノツイタ様ニ

バラバラ　イフ人ダ）といゝ　油紙と水の葉　郡部の別見て面白し

以下さ方言と東京ことばを記す

イッテクレナヨーワ（行て呉れなよ悪るい）　ガトヲ（そんなに）

ゴッチョーナ　（面倒な）
（準備をおこたらぬようにする）　ハソン　（修繕をふだんからそんじないようにする）
トベ　（かけ走れとふること）　キガマッテシタ（気が向いた）　ヨテル（落ちること）
ノブイ（ろくいの反のろい）　チヤクイ（ぞうさいこと）　クゼッテ　ヨル（寝ぐせをする）
ヘラカス（減ぎる（ろう））　私ノ様ナ　タラハン者デモ（私の様な足らぬ者でも）
トンデ　ユカント　人ト目ガツルイ（早く行かぬとみつともないとぶつ）
イマカゴマヨリ（今頃ろ）　シッチヤリコーベ（ちゃんと後（下り）出しなさいと）
無理トシタノデハナイ（わざとしたのでハないが故意でハないこと）　ドマクマシテ
（心配してこまごますること）　ハナッタ（始まった）　イビル（子をつかう）
マカイヤスカ　イッソ（少々ハるまいませんか）　コノガル（こだむこと）
コドキョーナ　モノダカラ（気のふさい者だから）　ヨワブ（わくむくこと）

キソッケ（まぶわるい）　グギザキ（かぎざき）　シヤイメ（さいた）
ヲキニトッテノカタヲ御買ヒナサイ（あれてつたなのを買いなさい）
ユーヅケラヲイタ（言付けておいた）　ヅクガナイ（雰気がない）
ケガラリサイ（きたなくさい）　ヌケ休シテ（子供が学校行かぬ途中
遊び考て休むことをふ）　モヨヲデゴサリマス（雨か雪か降りそうなことをふ）
チヤクイ（ぞうい こすい）　クジル（涙をがそのとらをひきぬいて出すことをふ）
途中ガ悪リスル（立ち寄ることをふ）　カベツコハヤル（家無流行する）
山の崩れて谷ケ淡たるところを東山梨郡巨摩郡辺にてさ（ナギとい
八代郡にてハ（ザレ）とい郡内にてハ（マルビ）とふ郡内にて（マルビ）と
ふ富士山の崩れ谷ケ淡たるとかぐとふこと
ナンダカ　カンダカ　サラ　モサラ（なにやらかやらいろいろのことをふ）

ヲユーダテ　（夕豆ゑんさ雪のとろろ汁の事（御夕豆と薄茶とすると風雅）

ケンテ（のせて）　ヅクナム（かぶむ）　チギリコンニャク（ちんぐりこんにゃく）

よまこんろ　とふことざの北こんさとふことばが宝暦年間の著書

裡見かんこちにさ「ヨモウ」とあ〳〵書にさ「ヨ月三とう（ヨ八月十七夜）と

いい「名見」とい（ヨ九月十三夜）とふことこんと（子とい豆）〳〵

ヨダイジン（有福者金持）　アンメイ（姉）　ビイジョー（小娘）　ガコ（赤子）

ナカイ（人の妻）　ヨエモノ（女中奉公人）　ボージョ（小僧）　マアヤン（守ヤ）

ヨバンシュ（下女）　ヨダンナ（だんな）　ヨヂヤン（おじいさん）　ヨヂヤン（親爺）

公文）　ボコンジョ（貧者の子供）

ウヤン　ヨダンナサン　ヨヨイト　ヨヨリンセ（子供抱びなあらいい子）

チイボー（次男）　ナイチイボー（三男）　長男さ名を呼ぶ〳〵次男三男が名を呼ぶ

ぜと　今ぶ〳〵ふものまの　ちゝとそ　所の名い言さ由さ孫のことさ　ちゝとさく

ヨコシッチヤン（お後室様とふこと）

ホートウ（味噌汁の中〳〵どんとおそ大根ごんぼ牛蒡ちぐ人と煮たるとふ）

アヅキボートウ（汁粉の中〳〵ちどんとおわにしたこと人なとふ）

ニシヤ（いゝやとっちとふ事とふ）　松カサ（松の実まつぼっくのこと）

シナンダレ（モヤの類）　スヂナメウ（ちゝ蛇）　ケイガウ（貝がう）

雪ウシ（そら豆）　ミギリ（まぐろの塩漬け）　チギ（量）

小松豆（さやうんざん豆）　猫の茶（ちゝぶ草）　ホゝん草（松葉草）

ナンカ　又は　ヨジヤッカ（おんばばとふ）

ワクサ（わそぶ）　コクソ（かいさのふん）　ハンガー（子のあかさち）

ヨンボウサンボウ（ぼろ〳〵衣服）　ツギモッコ（ぼろきれ）

ヨカゲヱサン（自在かぎ）　ヨシンメー（正月の〆飾りとふ）

「米櫃を鼠がかぶつと ふを 与八郎の妻女の婦人の話に よくけ〜
ふさた鼠が大なる米ごろつをかぶつとは不思議のこと 与市郎カブル
とさかじさこと〜て鼠が米櫃を飛びあけたるなり 与八郎野郎郎
へーシノナカノ イナ ミコウ (林の中のへんな道)
バンテンコニ見ル (ゆり〜に見る) ハシデ ハシデ メクッテモ知レヌ (い
ら(考と) あけても もれぬ〜ふとも) ゾンザエル (ふびさら) ヤセッライ (子供など泣くこと
とき五せる苦ふふ)
火が強クラ コビック (こげつく) 鼠のカヨンボドノ……(鼠の尾長の
ゲンチョリ キイタヨーデス (現によく聞きました)
セッカクチウデス (折角まつさかりですとふこと) 沙三郎郎郎
ヤレル (針をどこさんこ) アリンドラ (蟻) ゴンタノメヨ (子用兵衛狐さし)
ツケコ (あん餅) クヨンベ (変態の黒くちるとふ) ツバヨ (つばる)

スイカンボ (すいかのぽイタドリ芋)
トンピクリン 又ペータン ナマズ (極いちをこ動きやすき人とふ)
ムケンノ ラッチヤンガ キラシタ (向ふの仏さんが見られた) これを
電報にかけたら 向の仏さんが見られて 切られ と解し驚くこと
ちらんと思さんとわかし (ヤレ洪水 ふ中戸夢 稲妻 ねにてきこ)
北戸夢郎 北方の方言さ 地郎と大にこちらんり 逸見節 ふ郎 ねの
こと ざ
アンキボーデ コマリ マス (気弱き人で困ります) アノイチウ
(其後) アンナ カホ ブクチウデスカラ (あなに大気の人ですから)
ヒックリカエサー (逆さまだ) アレハ ホイデス (それは新発明)
コジッテ イケヌ (小児が泣て いけぬ) ビドウガル (まるーがる)

キガホケガケシテ（素足にて歩行するのこと）

アンナカ〳〵ライビッテドッスルト　ヲモッタ（あんな悪い雲（怪雲）とドッスんのかと思った）　ゴモットモサマ（迷惑のようす）　イコーベイ（行つ）

イブシテ　ヤッタ（嫌みを言ってやった）　スモジニ（真裸）

ガッパイ（合併）　ソンダモンカラ（支度であるから）

北巨摩の三月末温泉場のうそ　ヲ　聞かるこそば

ウソマラッカナイ（うそさびしらし）　ヲマニマガコビック（米飯がこげつく）

太夫御星サン（四の晴ヨージ星）　キヽグサイ（きてくい話し）

小便ヒルカ（せっかちな者の急ぎ）　船板番匠（船大工）

ガゴ（岩穴）　マテ（正直）　花御方（花嫁）

速ナ二時ニナリマス（すぐさまいちそく）　野蛇（赤（び）早

東山梨郡勝沼村地方にて

トテモイー　トテモ　ウマイ　などトテモとふ詞を極とふところに

つかふこゝす

ヲツリンサル（あっちもこっちも）　ゲイル（蛙）　ケイヂヤクシ（貝杓子）

イヽモリジヤリシ（飯盛る）　ハマユカ（東三堂）　ワタシ（あなた）テンキウ

（あみ）　ガトー（ぶち）　ゲー（いと）　ブチヤアール（捨て）　ショバー

（塩からい）　ハンデユベ（急ぎて歩メ）　ハアクマ（そばあるの）　ビンタン

（つむりのすぶ）　メカテヒッカリ（めつち）　ヨマーレル（ちからなし）

ヲツショー（ゆびる）　クド（のまど）　ワッサキ（新）　モヤ（そだ）

カンダイ（長まくら）　フイキ竹（少竹）　ウシンベイ　牛　カサンメイ

又　メシジョー（蝸牛）　ビクチョ（おもちゃ特のみし）　トカケ（かみつちょう）

南都西郡法相宗
ソビウカサント（さとらすと）　ソウイコミガハヤイ（理解が早いこと）
のみこみがいいこと）イクラカヤツカイカシランガ（幾ふかおだやかいらんが）
約ヲクレンダ（約束をくれた）　サバキガヨイ人（ふがあるく人）　キヨリガ
ハヤイ（早くとゝ乳がはてゝ心を向けること）
南巨摩郡
フングリモツリカタ（人をたもつるかた）　ウツパシル（走る）　カスクラ
ウキリ（思ひをきく）　ウツチンダア（死ンだ）
東京ニテ芝増上寺ヲ　ヲミヨーギバナトイフ國幣社一の宮の
祭日の頃流鏑馬神輿の行列ヲ御幸トイフ　ヒトツ
にハミてきぬどゝ　ヲヨンドウ　又　ハヨンドウトモ
ク子　垣根ヲふキ巨摩郡　ヲヨーリンボウ（職多）　ツガ又タイシ（たいし）

モグラヲスグニ（門口ヲ真すぐに）ハヒル
天蠶絲になる虫を勝沼辺にてハ（シラガタイフ）トイフ　又　桑の木に
なるなる足なしの種類をカヌスット　トイフ
女の衣服つまのさきを　ヨビビクトイフ
雨降コツコトする供に雨天のぬぎ又供に雨傘ヲ　ヲ出ト
ふる　コツコ　ヲさして　ヨムト　いいたり　中巨摩郡
中巨摩郡ニテハ　葱刈鎌ヲ　東郡ニテハガヂトイフ　カヂ鎌の
事なり
南巨摩郡奈良田村ニテ　ヨキ
ソウノー（ヲ立のこと）　メッソシ（たいて）　ツセル（まること）
デマ又ドマ（泥ミ）　チヨックリコッデッラ（一寸ばかりあるおど）
メタヨグリマハシテ　イケセイ（やたらにいぢってはいけない）　イマサー（今ア）

ボンザー（盆の頃）　ゴチソーサマデシタ（馳走を致しました）
チヽウチテ　ジンコテ　アガリマセ（早く盃を受て御にあがりませ）
ヨシシ（目六の人又は主人をいふ）　ジンコニショー（御ごしょ）
日ガセイイカラセガアツリハナイ（日が暑くないから背中があつくない）（南日高郡方言）
ソヽシイ（涼イ）　ツカレザガアツタラ（分れ際があつたら）

標草代用の葉

標草の代用にする葉あり桐蓮　ふき　柿　よもぎ　及
山葉とふ草を湯ねりして用ゐる

ねこの尾に就て

猫の尾の長きに就てふをきくに
蛇の性質を知てゐると尾の短かき猫は然らずとふ
化ると
ゆくもこうもなる
又多分
蛇を物にゆくと
（弱き猫が尾をつかまれたと思ひてあきらめ逃げたるとぞ）
ふと

雨が降る

猫が手をもつて顔を越してなでる時は雨降る
蛇が竹に登ると雨が降る
硯石をふせると雨が降る（ふんどしを結ぶ）

風除の鎌

甲府在て風を防ぐまじないとて鎌を長竿の先（つけ斬）
出しなどと諸所に建て見る鎌さかさいなりを吊ぐと信じ居る
雨いつる者あり又風をゆるめ風の神をなだめんとて信ず

風防のまじない
と鎌をもつて

千塚村にて見たる鎌と逆に鎌とつける

ゴチソーサマ

甲府にて職人を居ひ其日の賃錢を渡すとき職人はゴチソー
サマとふて礼をいふ食物をとらぬのにわざわざ
然らぬ者は

あいきょうこぞう

中巨摩郡稲積村也方にて午後人に逢中まて行道ふ時ハタヾイマーとゝふて あいきょうす東山郡迦にてハヲツカレ又 ラツカレサマとゝふて 難とかゝゆ〳〵こゝます

姑と情を通ず

八代及巨摩の諸村にて男が情と女に求めんとする時ハ道にて女に出逢ふ男ハ右手を以て女の食指と中指とを握る女の方にても情を求むゝときハ男の食指と中指とを握る迄ハ女ハ親がゆるさぬとか妨〳〵とかゝふと男に其意を知らせるハ握らんとするから男の親指を指と押す為又女ハ男を嫌ふとき男の手を捻る迄さぬ〻

古俚夢

中巨摩稲積村也に古き俚夢あり

「ヲテントサン 東ハアラ月サン テシショー ニマケテ雪ーシカラ」

天正ゐろた行れし頃の俚夢と見ゆ

きつさ姫

富士川船を下るに南巨摩の福士迄より富士の麓にふさ深紅の花咲る五月の末あり花の咲川船まて見るとあるいも多し 茱萸さの麓すゝ下流の麓のみに生ずれい就て之人の ふにさ昔し茱萸さのゆに五月姫とゝる美女身を投て死せり其ゆゑ 茱萸さの麓に此木を植しなるとゝ茱萸さの流の麓にいすゝめのゝ姫の霊に ちれりと

西行峠と西行法師の面影せし歌

南巨摩郡波高島村より甲州へ越ると西行峠とゝふ山道あり之人の話 西行法師歌仏の為め旅を学ム已の涙歌を慢り誰人も相 手に立つ者なしのうんと思い此山道にかゝり山賊に逢い甲州にて はゝ高ゆゝ人あるやと山賊答て 歌よるまるやゝ〻ぶやりなるのと 問かしゝやんとて イキッチナ ツボミシ花ガ キッチナニ ブッピ ライタル 桶トジノ花

西行法師此の歌を解せず火に焼き

山賊さへかゝる歌をよめば國中に入らば必行き用に急ふや
もれず徘徊して後に甲斐へ入るべしと峠をかしたる
西行峠といふ所と右の方言葉は往古につぼみ色花かゝの沙汰
桶底の花とさ桶の皮を曲物をメ底る故に桶底の花と桶花と
いふなり

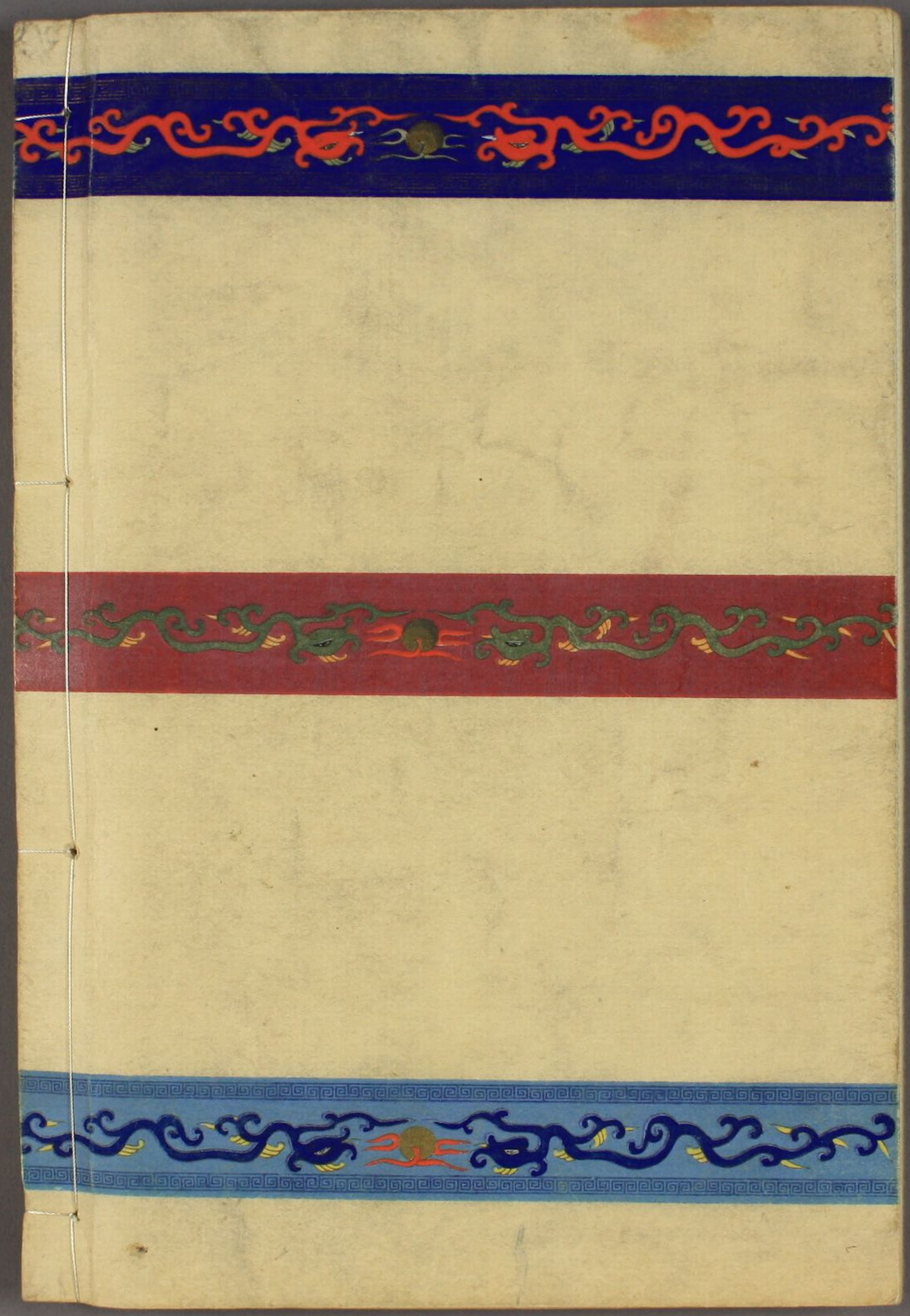
此の辺りの方言に安藝屋敷ヨシウ地方にても同様の傳へあり

イキサマニ　ナニカトミシハ　モドロサマニ　ナニカトミレバ　シヤクトジカハ

キノハナ

又羽前鶴岡の辺にて西方峠の向ふ山賊の事

ヨキテヤマニ　ツガミシ花ガ　カヘリテヤマニ　サクモサイダリ　ツパトデノ花

安藝羽前甲斐なると西行の詠ると共に偽にて西日
こそなり（つばさ谷鼓入の曲物のこと）
甲斐の国葉巻の方終

山中文庫